

一般演題

演題1 上腸間膜動脈から下腸間膜動脈と総肝動脈が分岐していた稀な一例

○大澤 得二, 馮 新顔, 佐々木信英
松本 陽子, 小野寺政雄, 奈良 栄介
藤村 朗, 野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座

目的 岩手医科大学歯学部の平成14年度の解剖実習において、極めて稀な一例を見出したので報告する。

材料・方法 気管支肺炎により死亡した79歳男性遺体に認められたものである。

結果 この例では、下腸間膜動脈と総肝動脈が上腸間膜動脈より分岐し、共同幹を形成していた。また、脾動脈は腹大動脈より独立に分岐しており、脾動脈からはさらに左胃動脈が分岐していた。さらに本来の下腸間膜動脈の遺残物である可能性が考えられる短い索状の構造物が腹大動脈の前面から突出していた。

考察 腹腔動脈と上腸間膜動脈は分岐の変異が多いことか知られているか、それらは一度形成された血管 (ventral splanchnic artery および ventral longitudinal artery) の消失部位の違いにより生じると考えられている。しかし、腹大動脈から上腸間膜動脈と下腸間膜動脈の共同幹が分かれるのは極めて稀な例であると考えられる。本症例では下腸間膜動脈が上腸間膜動脈から分岐していただけでなく、総肝動脈も加わり幹を形成していることにより、極めて稀な例であると考えられる。本症例についても発生学的な解釈が可能である。すなわち、脾動脈と総肝動脈をつないでいた longitudinal anastomotic artery の一部が消失することにより、左胃動脈を伴う独立した脾動脈を形成し、一方、総肝動脈と上腸間膜動脈をつなぐ longitudinal anastomotic artery が残存し、common mesenteric artery に結合することにより hepato-commonmesenteric trunk を形成したものと考えられた。

演題2 抗癌剤によって培養メッセル軟骨に誘導されるアポトーシス細胞の特徴

○品川 拓人, 石関 清人, 名和橙黄雄

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

目的 抗癌剤のエトポシトとカンプトセシンによってメッセル軟骨に誘導される細胞死がアポトーシスによるものか否かを検索した。

材料・方法 細胞死は胎生16日のマウスから分離した培養メッセル軟骨にエトポシト (200 μ g/ml) とカンプトセシン (50 μ g/ml) によって誘導した。これらの効果は TUNEL 法と光顕および電顕に加え、免疫組織化学的に解析した。

結果 エトポシト処理した培養細胞はアポトーシスの指標となる多くの TUNEL 陽性細胞を示した。微細構造的にエトポシトでのアポトーシス様の細胞死は細胞性出芽、核クロマチンの濃縮、アポトーシス小体の形成によって引き続かれた。これに対し、カンプトセシンによる細胞死はエトポシトと同様に TUNEL 陽性細胞の増加を示した。これらの抗癌剤処理後のアポトーシスは時間依存的に増加し、特に、12時間後から急速に増加した。P53の免疫染色では、この蛋白は正常な培養軟骨細胞では陰性であったが、エトポシトとカンプトセシン処理群では恒常的に促進された。一方、bcl-2の反応は培養初期の正常軟骨細胞に局在したか、抗癌剤処理群では認められなかった。

考察 エトポシトとカンプトセシンによってメッセル軟骨に誘導される細胞死は典型的なアポトーシスによる細胞死で、これらの抗癌剤は腫瘍細胞のみならず、正常な軟骨細胞にもアポトーシスを誘導することか示唆された。